

史料の保存について

半 田 良 一

私は、専攻の関係上、日本近代史の中での山村経済社会の展開に関心をもち、機会をみつけては山村への研究資料の探訪を試みる。草深い僻地の村を初めて訪れ、数日間そこに腰をすえて旧家に史料を索め、あるいは古老の経験談に耳を傾ける楽しさは、この研究分野ならではの醍醐味と、常に感謝している。

さて私の研究生活もすでに四半世紀になるが、この間に山村の姿も住む人の気風も大きく変わった。生活はあらゆる面で機能化し、所得は確かに向上したが、それとともにかつてのゆとりが失われた。昭和20年代には、どこの山村へ行っても一次資料に事欠かなかった。その当時は、明治・大正の激動期を生き抜いてきた古老たちがまだ元気だったし、村役場にもまた県庁や営林局にも、古い記録や統計類が倉庫の奥深く大切に保存されていた。それらは、戦後の日本の社会が足並み揃えて経済成長の進行を始める前の、山村の昔ながらのゆとりの中に、愛蔵されていたわけである。

けれども歳月は、この種の史料を急テンポで散逸させてしまった。近代史の生証人たる古老たちが櫛の歯を引くように世を去ったのは是非もないが、農家の生活様式の変化の中で、先祖伝来の記録類への関心やそれを伝承しようとする熱意も、とみに薄れてきた。一方役場や県庁の場合も情報量が著増して、古い文書を保存するゆとりが、空間的にも狭まり気持の上でもなくなった。とりわけ、村役場が統合されたり県庁などが改築されたりするごとに、古い倉庫は毀され、機構整備の名のもとに文書の管理責任も分散されて、資料の散逸する例が多い。多くの庁舎で、20年前には、専用の倉庫の棚に書類綴りが堆くしかし整然と並んでいた。けれども10年前には、それらは什器類に混って片隅に雑然と投げ出されていた。そして最近訪れると、すでに庁舎は移り倉庫はなくなって、書類の消息を知る人もない有様である。研究の進展に応じ新しい学説を一次資料に溯って検証しようとしても、往時の資料はすでになく、うたた愛惜の念に駆られることが、頗る多い。

とはいえ、農山村社会の急速な近代化の中で、これら史料の保存の責任を村や県の関係者だけに押しつけることは所詮無理だろう。歳月を経、また研究が深化するとともに、この種史料の価値はますます高まりかつ普遍化するに相違ないが、その収集保存体制はまだ整っていない。現段階でその価値を認識し、弾力的に受容し、かつ公開性を保証しうる機関としては、さしあたり大学図書館が最適ではなかろうか。篤志家の蔵書が図書館へ一括収蔵される例は少なくないが、官庁関係文書の廃棄処分にさいして学術的見地から保存の要不要を点検して収納するシステムを、うまくつくりえないものだろうか。資料の収集整備には、個々の研究者の情報集めの努力が先行することは当然だが、手続上の問題などを勘案すると、その円滑な授受のためには、やはり図書館が直接の受け入れ主体になってほしいと思う。

あるいは専攻分野の立場に偏した過分の注文かもしれないが、需められるままに素懐の一端を述べた次第である。

(農学部教授・附属演習林長)